

家族造形法の深度

家族造形法を使った事例検討

その4

早樫 一男

○はじめに…。

「家族造形法を使った事例検討」のバリエーションを紹介します。

基本的な進め方は前回紹介したとおりです（必要な方は、対人援助マガジン第2号や第3号の「家族造形法の深度」を参照下さい）。

前回同様、ライブを紙面で再現することはなかなか難しいところですが、以下は、ある研究会での様子です。

○提出者の思いは…。

「特徴的な場面を再現することによって改めて確かめたいことがある」「気付かなかった面や新しい情報を手に入れることができれば」というのが、今回の事例提出者（以下、提出者）の思いです。

家族は両親（父親は40代前半 母親は30代後半）と長男（小学校高学年）、長女（小学校中学年）の4人です。父親は転勤族、長男は不登校、長女は兄に追従するようなかたちで不登校という状況です。

○家族を造形していく…。

いつものように、家族役割を担うメンバーが提出者によって指名されました。

その後、家族それぞれの人柄や特徴についての補足説明（役割イメージを吹き込む）が行われました。

その後、提出者が彫刻家役となり、各メンバーを粘土に見立てて、ゆっくりと造形していきます。

提出者からは、「3つのシーン」を再現したいという要望があり、まずは、一つめのシーンを造形していくことになりました。

○不登校の長男と母親を中心に…

母親が長男に向き合っています。母親の左手は下向き加減の長男の右肩に置かれています。妹は母親と兄の様子を座って眺めているという造形になりました。父親はこの3人からは遠くに置かれました。3人には背を向けて座り、まったく別のところを

見えています。



(写真1 解説) 長男に向き合っている母親 二人
を見ている妹



(写真2 解説) 長男に向き合っている母親と二人
を見ている妹 中央上に父親

○静止の時間…。

家族全員の造形が完成後、改めて、しばらく静止の時間を作ります。いつものように、この時間はそれぞれの胸の中に湧いてくる思いを確かめる貴重な時間となります。

オブザーバーには、ギャラリーとして、彫刻全体をさまざまな角度から眺めたり、各メンバーに近いところに位置し、追体験するようという指示が与えられました。さまざまな角度から、第三者として家族を観察します。一方、追体験に近い感覚を共有しながら家

族のことを考えていく役割も担います。

静止の後、各役割を演じているメンバーからのフィードバックです。時には、事例提出者やギャラリーのコメントが加わることで、「here and now」で思いがけない展開となっていくこともあります。

○それぞれの語りに耳を傾ける…。

提出者は創った順番に合わせて、それぞれのフィードバックに耳を傾けていきました。母親「お父さんは、向こう側に座っているだけで、遠い存在という感じがします。娘もわかるのだけれど、とりあえず、息子のことを何とかしないといけないというか、するのは私しかいないので、息子をなんとかしようという気持ちが殆どです。お父さんに助けて欲しいけれど、お父さんはあまりにも遠すぎて、呼べるような距離にまったくくない。私がとりあえず息子をなんとかしないと息子が可愛そうという気持ちでいっぱいです。」



(写真3 解説) 母親から見た風景の一部

進行役「お父さんへの期待は？」

母親「期待というか、呼ぶにも呼べない距離にいる。殆ど見えないというか…。父親については、気持ち的に頼れない」

父との物理的距離、さらには心理的距離が言葉として表出されました。また、息子とは心理的に近いということも、改めて伺われました。

母親「息子には緊急性があって、息子からは眼を離せないという状態。とにかく、息子のことを何とかしないといけないという使命感がある。娘は見えるけれど、娘は安定した状態にあるので、まあいいかという気持ちです。」

次は長男に確かめます。

長男「ひたすら悲しいなあという気持ちです。お母さんしか味方がいない。お父さんは全然見えない。妹はかすかに見えるけれど、存在を感じているのはお母さんだけで、お母さんだけが味方で…。どうしよう、悲しいなという感じ。」

進行役「この場所や姿勢はどんな感じですか？」

長男「姿勢は窮屈といえば窮屈です。からだは固まった感じがあって、リラックスできている状態ではない。」

進行役「少しでも楽になるポーズや場所などはイメージできますか？」

長男「それはよくわからない。椅子に座っている方が楽かもしれないが…。」

進行役「お母さんが正面にきて、面と向かい合っているというのはどうですか？」

長男「安心感がある。窮屈ではない。肩に置かれている手も温かい感じがしてる。」



(写真4 解説) 長男から見た風景の一部

進行役「息子の話をきいて、どう思いますか？」

母親「私を頼ってくれるのはうれしい。余計に、私がしてあげないといけないという気持ちが強くなる。」

再度、母子二人のつながりの強さが明らかになりました。

次は、長女（妹）に確認です。



(写真5 解説) 妹から見た風景の一部

長女「お兄ちゃんが可愛そうと一瞬思ったが、段々腹が立ってきて、蹴っ飛ばしたくなるような感じ。ずるいという感じ。」

お母さんがお兄ちゃんの方を向いているから、私としてはちょっと楽なこともあるが…。お母さんについては、あまり悪く思うような気持ちは、最初なくて、大変だなあと思っていたが、段々、お兄ちゃんはずるいと思ってからは、ちょっとお母さんにもむかついた気持ちが生まれてきて、何、甘やかしているのというような感じ。最後は、お兄ちゃんずるいという気持ちがはっきりしてきた。」

進行役「ずるいという気持ちは表現しますか？」

長女「それを出してしまうとまずいという感じがあり、本当は蹴っ飛ばしたいのだけれど、行動で表すとまずいという気持ちもあるから、我慢している。」

この後、提出者から兄妹間のエピソードが思わず語られました（省略）。

長女「不当に自分の持ち物を取られているような気がする。正々堂々と戦えよ！みたいな気持ちにもなる。」

進行役「長女の気持ちについて、お母さんはどの程度わかってくれていると感じていますか？」

長女「あんまり関心がないように感じている。」

進行役「お母さんに直接伝えたいことは？」

長女「お母さんはお兄ちゃんに全力投球という感じだから、“お母さんはもういいや”という気持ちで、むしろ、“お父さんは何をやっているのか”という気持ちかわいてきて、お父さんの方をちらっと見たくなる。」

進行役「お母さんには期待していないとい

う感じなのですか？」

長女「この二人の間で完結しているから、お兄ちゃんのことを“ちょっと、甘やかしすぎではないか”と思うけど、お母さんはいらちやし、あっち向いていてくれるのは楽かな…」

進行役「ここの居心地は？」

長女「悪くはない。割と気楽な感じ。」

進行役「お父さんについてはどう？」

長女「お父さんは遠い。何をやっているかわからない。お父さんは私のことをかまってくれてもいいんじゃないかと感じている。」

最後に、お父さんです。



(写真6 解説) 父親の周辺の風景の一部

父親「とにかく、仕事が忙しい。息子はいじめられて大変というのは知っているし、どうにかしたいという思いもあるが、仕事があるからいけない。妻に任せている後ろめたさはある。罪悪感もあるが、一方で、暗黙に責められていると感じている。」

進行役「責められているという感じが伝わってきているのですか？それとも責めら

れているのではないかと感じているのですか？」

父親「そこにいないからこそ、そう思っている。」

○外から見た家族、内に入って感じた家族…。

ギャラリーからのコメントです。

Aさん「父親の側に近づいてみたが、特に印象に残らなかった。仕事に行って、そっちに熱中している。今になって考えると、後ろめたさもあったのかなと思うけれど、ぱっと見た感じでは、父親は仕事の方に逃げているという感じで、家庭は母親に任せっきりで、仕事オンリーやったかなあ。母と息子の二人で完結している。」

ギャラリーは、造形のプロセスを外から客観的に見ることができます。一方で、静止の時間には、各家族の横に位置し、同型の姿勢をとって感じ取ることにより、主観的、感覚的にも触発されることがあります。

○2つめのステージ

提出者は3つのステージを展開したいということですので、2つめのステージの造形を作ることになりました。

造形法の面白いところは、さまざまな場面を創り出せることです。その場で感じたことをきっかけに、違った場面を創ることも可能なら、今回のように、あらかじめイメージした場面を創ってみるということもできます。

いずれにしても、造形のプロセスとその後のフィードバックが興味深いものとなりま

す。

お母さんは横になって、ビール瓶を持って、くだを巻いているところです。「おまえがしっかりしないからだ！」と一人ですんでいます。子どもたちは部屋で耳をふさいで座っています。



(写真7 解説) くだを巻いている母親と子どもたち 後ろはギャラリー



(写真8 解説) 別の部屋で耳をふさいでいる子どもたち

お父さんは、マンションのドアを開けて、帰宅したところです。惨状を嘔然として見ているという感じです。

○動きをつけることによって、気持ちの変化を確かめる。

静止した状態の造形を通して感じることをフィードバックすることによって、さまざまな発見が生まれますが、時には、動きをつけることによって触発される気持ちや身体感覚に注意や関心を払ったり、確かめ合うということも可能です。

二つめのステージの配置が決まったところで、一つめのステージ(写真1～6)の位置から、ゆっくりと二つめのステージに動いてみることにしました。そして、その間の気持ちに集中し、その次に、二つめのステージの造形でしばらく静止し、その感じを味わうことにしました。

さらに、同じ動きをもう一度繰り返すことによって、動きを伴う中での気持ちをじっくりと味わうようにという指示が与えられました。

父親「仕事が終わりに、遅い時間に帰宅。後ろめたさも抱きながらの帰宅なので、気分は重い。ドアを開けた瞬間、妻の姿が目に入ったが、自分の保身と誰かが悪いという考えが浮かんだ。」

父親の言葉を聞いて、提出者は「なるほどなあ」と一言。

長女「お母さんが暴れ出す前は、“お兄ちゃんずるい”とお兄ちゃんを蹴飛ばしたい気持ちだったが、お母さんが暴れ始めたら、“何だよこれは！”とひたすら思っ、こっちに逃げてきたお兄ちゃんとひたすら目を閉じていたら、さっきより

お兄ちゃんのごことは近しく感じられて、一人にいるという感じは薄まった」

ここでは、兄妹二人のつながりに関する気持ちが語られました。



(写真9 解説) 耳をふさいでいる長女

進行役「兄とは、妙に連帯しているという感じ？」

長女「子ども同士が同じところに押し込まれたという感じがしました。」

進行役「お父さんに対しては何か思いますか？」

長女「お父さんには期待もしていないし、お父さんが何をしてくれるかあまりよくわからない感じがする。できれば、お母さんをなだめてくれたらいいとは思った。」

進行役「この場を収めるとか、お母さんをなだめるとかといった期待は少しはある？」

長女「できれば…」

長男「お母さんだけが頼りという感じだったのに、急に暴れ出すので、これは怖いと思った。逃げ出さなければと思った。」

確かに、妹とは連帯感がある。お母さんに対しての仲間という感じになった。お父さんのことは何も考えていない。あえて言えば、早く帰ってきて…。」



(写真10 解説) 耳をふさいでいる長男

母親「一生懸命、息子のことに対応しているのに、一向に成果がなく、お酒を飲まずにはいられない。飲んだら、痛快な感じがして、主人が帰ってきたのはわかったけれど、“ざまあみろ”という感じが強い。お酒を飲んだら気持ちが吹っ切れる。とりあえず、飲まないで私の精神が壊れてしまう。だから、飲まずにはいられない。」



(写真11 解説) くだを巻いている母親と耳をふさいでいる子ども 後ろはギャラリー

Bさん「お母さんが、突然、ぐれたと思った。父親に対する、ざまあみろといった思いは意外だった。」

母親「このイライラを止めるにはアルコールしかない。アルコールがなかったら、私の方がどうかなりそうという感じ。飲んでいる間は、子どもに暴力を振るっているという意識はなく、私の気持ちは楽。」

進行役「子どもたちのことは？」

母親「飲んでいるときは、全然、頭の中に入っていない。子どもが怖がっているといったことは全然意識にない。私にとって、アルコールは切るに切れないものです。私からアルコールを取ったらいられない。絶対、離せない。」

進行役「旦那さんは離せるの？離れているのか？」

母親「助けをよんでも、いざという時にはいつもいない。旦那に私の姿を見せつけたというような気分もある。」

○提出者を交えての意見交換

提出者「それぞれが語った内容は、これま

での面接で語られたことと殆ど重なっており、細部まで伝えた訳ではないのに、不思議な感じでした。一番驚いたのは、妻の夫に対する“ざまあみろ”という発言でした。確かに、よくわかるなあと思いました。直接、言語として表現した訳ではありませんが、そういう気持ちはあるのだろうかあと改めて感じました。妻の“ざまあみろ”という発言を聞いて、夫はどのように感じたのか聞いてみたくなった。」

父親「腹が立ちます。」

提出者「夫はこのような場面に出くわした後、見て見ぬふりをして、お風呂に入っ
て、知らん顔をして寝ます。妻のことは手
がつけられないのです。」

進行役「お父さんの言った“腹が立つ”と
いうのは、自己保身の思いとどこかでつ
ながっていますか？」

父親「私に対するあてつけ、何も出来ない
だろうというように突きつけられている
感がある。子どものことについて、何か
しないといけないと思っているけれど、
一方で、時間のせいにしてたり、仕事のた
めという言い訳で引き延ばしてきてい
る。しかし、より現実的な場面に出くわ
すと、自分は悪くないという思いが先に
出て、現実を認めきれない。」

進行役「こういった場面が、例えば1回だ
けとか、たまたまやったら、許せるのだ
ろうか？」

父親「1回目の場面だったら、もともと妻
はかんしゃく持ちなので、許せると思う。
毎日になると、スルーしてしまう。」

○3つめのステージ

場面が変わります。長男の担任が家庭訪
問をしている場面です（写真12）。担任
は非常に若い先生です。母親の攻撃的言動
に誘発されて、父親も加勢するという状況
です。子どもたちは別の部屋で両親と担任
とのやりとりや雰囲気は感じていますとい
う指示が出されましたが、この場面には登
場しません。



（写真12 解説） 担任を追求している両親

先生「うつむいていたら、つま先しか見え
ず、顔を上げたいのだけれど、できない。
うつ向いている方が楽な感じもある。顔
を上げて何か言った方がいいのか迷って
いる。でも、とりあえず、うつ向いてい
ようかなあという感じですね。」

母親「指を指していると、段々腹が立って
きて、息子があれだけ苦しんでいるのに、
この担任の先生は、息子をいじめている
子どもに対してちゃんと指導してくれな
いから、いつも状態が悪いままで、いつ
になっても学校に行けない。だいたい、
この先生が頼りないからと思うと、段々
段々腹が立ってきて、息子が学校にいけ
ない全責任はこの先生にあるのではない

かというような気持ちになってくる。この先生に言っても期待できないというか、信頼できていないので、これだけ言うてもわからんか！という感じもある。」
父親「妻は怒っているし、同じようにやっておかないと、後で何を言われるかわからないので、同じようにやっている感じがありました。後は、悪者として、家族ではない誰かをに決めたがっていたので、“先生だ！”ということで、指が差しているところがありました。」

進行役「夫が横にいて、同じようなポーズをしていることについてはどうですか？」

母親「二人で連帯し、共同でやっているという感じがします。一緒に攻撃しているので、心強いです。」

ここでは、先生に対して、両親が連帯して向かっているというのが明らかになりました。

進行役「母親が心強く思っていると言うことは、父親にとってはねらい通りやね。」

提出者「確かに、夫は妻が怒りますのでという言葉をよく使っています。改めて、子どもに聴いてみたい。」

長男「ホッとしたというか、先生は怒られていて当たり前だという感じがした。先生が悪いと思っているから、親が先生を怒っているのは悪くない。」

長女「先生のごことはあまり考えていなくて、“いいぞ！やれやれ！”という感じ。さっき、お母さんにはむかついて、お父さんにはがっかりしていたので、やっと二人で、並んで、同じことをしているのが

うれしい。初めて、お父さんのことを見直せる感じがして、“頑張れ”って思いながら、喜んで見ている。」

進行役「子どもたちにとっては、悪くない場面ということやね。ところで、親は子どもたちがこの場面を見ているとか、雰囲気を感じているとか、いったような意識はあるの？」

母親「同じ家の中だから、子どもが聴いていると思うけれど、先生に向かっているときは、半分以上、子どものことは頭から飛んでいます。私は、とにかくこの先生に言わないと気が済まない。子どもがどう聴いているかといったことへの関心はない。」

父親「私は思いっきり意識しています。」

進行役「妻と同一歩調で揃えようということ意識してるんやね」

Aさん「両親は共同作業できている。先生のお陰というか、先生がいるからできるんやなと思って見ていた。」

Bさん「お父さんは保身やというのをやっぱり思った。確かに、夫婦間の葛藤を丸く収めるにはいい方法かもしれないが、今さえよければいいという対応をしているという印象を強く受けた。」

提出者「システムとして面白かったのは、対学校、対教師という形をとって、夫婦が連合する。その中で、バーンアウトしていく教師が大変多いなあという図が典型的によく見えたのでとても面白かったです。」

進行役「先生にとってはたまらないけれど、家族にとっては、それでバランスをとっている。」

(その後、提出者は事例の簡単な紹介を行い、今後に向けてのフリートークが続きましたが、そこは省略します。)

○改めて、提出者の感想です。

3つのシーンを組み立て、それぞれのシーンの家族の気持ちを追いかけることができるのは、家族造形法の大きな魅力である。

まるで催眠術にでもかかったように、造形で得られたセリフと実際の面接で得られるセリフは怖いほど一致する。しかし、一致するのを驚き、喜ぶのが造形法の目的ではない。

今回の造形法で、一番のポイントは母親の夫に対する「ざまあみろ！」という気持ちであった。その後の面接で、母親に「お酒を飲んでる時に、夫に対して、“ちょっとざまあみろ！”って感じはありますか？」と尋ねると、少し考えて「確かにあるかも！」と答えていた。

さて、ここからの問題は、援助者がどのように造形法で得られたひらめきを今後のセラピーに活かして行くのかである。事実を造形法で当てるだけでは、占いと変わらない。

今回は時間の都合で、今後どうすれば良いのかまでのまとめは出来なかったが、十分な発想とひらめきは得られた。事実、この造形法の後、母親の夫に対する「ざまあみろ！」という思いを軸に面接を続け、2ヶ月後、長男は登校に至っている。

今回のケースで、あらためて造形法の奥の深さと、家族療法においてジェノグラムと造形法がいかに役に立つのかを学ぶこと

ができた。

○おわりに…。

今回は、いくつかの場面を造形してみるという展開を紹介しました。3つの場面、それぞれの風景と気持ちが表出されて興味深いものとなりました。

この家族は、常に、二人がつながっていないと不安定な家族なのかもしれません。

ところで、一つめの場面から二つめの場面に移る際には、動きをつけてみるというバリエーションも加えてみました。静止した状態で気持ちを確認してみる、気持ちに集中してみるということが出来るのが造形法の特徴の一つであれば、動きを伴う中で気持ちに集中してみるということも可能です。その際には、何度か繰り返してみたり、動きのテンポを変えてみたりといったバリエーションを加えることがあります。

機会があれば、改めて、動きを伴った造形法の展開も紹介したいと思います。

今回の掲載について協力いただいた事例提出者を始め、研究会のメンバーにお礼申し上げます。